

第2章 キャリア教育の視点に立った教育活動

1 基本的な考え方

(1) 各教科では

教科本来のねらいを達成する授業を展開するとともに、身に付けた力が適切な自己表現力、問題解決力、強固な意志などとして発揮できることに、児童生徒自身が気付くことができるような場면을工夫する。

キャリア教育ではぐくみたい力は、なりたい自分を実現するために努力する過程において、総合的に発揮されるものでなければならない。これらは、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」に示されているが、これまで各教科の目標や内容として身に付けさせようとしてきた力でもある。したがって、各教科では、キャリア教育を推進するというで特別な学習展開を意識するのではなく、基本的には、本来のねらいを達成する授業を大切にすることがある。

各教科において身に付けた力は、なりたい自分を実現するために努力する過程で必要となる力の基盤となるものであり、その過程においては、適切な自己表現力、問題解決力、強固な意志として発揮できるものでなければならない。そこで、日常の授業においては、各教科のねらいを達成することはもちろん、身に付けた力が実生活において適切な自己表現力、問題解決力、強固な意志につながるものであることを児童生徒自身が気付けるよう、先人の生き方や働き方に隠された教科にまつわるエピソード、産業界における活用例などを機会をとらえて紹介していきたい。

なりたい自分を実現するために努力する過程においては、各教科で身に付けた力に不足を感じたり、更に進んだ力の必要性を感じたりすることも考えられる。このような場合には、必要に応じて、各教科で重点的に身に付けさせる力を設定する、あるいは、新たな内容を付加するなどの工夫が考えられる。

(2) 道徳、特別活動、総合的な学習の時間では

本来のねらいを達成するための体験活動を通して、自分を更に成長させるきっかけになる課題と出会う(なりたい自分を見付ける)場面や課題の解決に挑む(なりたい自分に向けて努力する)場面の設定を工夫する。

- ・ 好奇心や意欲をかき立てられ、達成感や充実感を味わえる感動体験 など
- ・ 自分を成長させる必要性を実感する成功体験や失敗体験 など

このような体験活動がキャリア教育を展開する核になる。

各教科で身に付けた力を適切な自己表現力、問題解決力、強固な意志として使いこなせるようにしていくためには、自分の成長につながる課題と出会い、その解決に挑む過程を体験させることが必要である。

自分を成長させる課題に出会う場面としては、総合的な学習の時間を中心として学校内外で行われる様々な体験活動が考えられる。児童生徒は、体験の内容そのものはもちろん、働いている人々の姿や会話などの中から、「自分は～に生きるために したい。」という、生き方、働き方に関するあこがれや進路に関する具体的な目標をもつことが期待される。つまり、今ある自分を更に成長させるきっかけになるということであり、自分を更に成長させるための課題に自ら気付

く場でもある。そのようにして気付いた課題に対しては、児童生徒は強い意志と粘り強さをもって解決に挑むことが期待できる。文部科学省が推進している「キャリア・スタート・ウィーク」は、自分を更に成長させるきっかけになる課題と出会う（なりたい自分を見付ける）場面として重要な意味をもつ。

課題に出会った児童生徒は、学校生活や家庭生活において、その後しばらくの期間、解決に挑む（なりたい自分に向けて努力する）ことになる。道徳や学級活動の授業は、課題の解決に挑みつつある児童生徒を精神的に支えるという面から重要な役割をもつ。その過程では、各教科等で身に付けた様々な力を適切な自己表現力、問題解決力、強固な意志として発揮できるようにしていくことが求められる。また、自分が重点的に伸ばしていかなければならない力や補っていかねばならない力を自覚して努力するだけでなく、各教科の学習にこれまで以上に意欲的に取り組むなどの変容が期待できる。

このような経験を積み重ねることは、学力の向上はもとより、学習そのものへの有用感を高めることや、自らの成長への手ごたえから自己効力感さらには自信を深めることにつながる。

(3) 進路指導、職業教育とキャリア教育

キャリア教育は、進路指導、職業教育を含む広義の概念であり、これらの目的や内容に本質的な差異はない。その趣旨は、どのように生きるか、そのためにどのように働くかに関する指導が十分であったかという視点から、従来の進路指導や職業教育に工夫改善を迫るものである。

ア 進路指導とキャリア教育

本来の進路指導は、児童生徒が自らの生き方を考え、将来に対して目的意識をもち、自らの意志と責任で進路を選択決定する能力や態度を身に付けることができるよう指導・援助することであり、キャリア教育の中核に位置付けられる。

しかし、従来の進路指導では、児童生徒一人一人の発達を組織的・体系的に支援するといった意識や教育活動相互の関連性や系統性を踏まえた計画的な指導体制などが十分とは言えず、児童生徒の意識の変容や能力・態度の育成に十分結び付いていない状況があった。キャリア教育は、このような現状を抜本的に改革しようとするものである。教育活動全体がキャリア発達^()への支援という視点を明確に意識して展開されることで、進路指導本来の趣旨を生かした教育活動の展開が期待できる。

イ 職業教育とキャリア教育

職業教育も、専門高校等で行われる場合に限定すれば、職業に従事する上で必要とされる知識、技能、態度を習得させることを目的として実施される教育であると考えることができ、進路指導とともにキャリア教育の中核に位置付けられる。

職業教育では、職業や仕事に役立つ知識・技能を身に付けさせる教育活動と自分が就きたい職業や仕事にどのような知識・技能が必要であるか

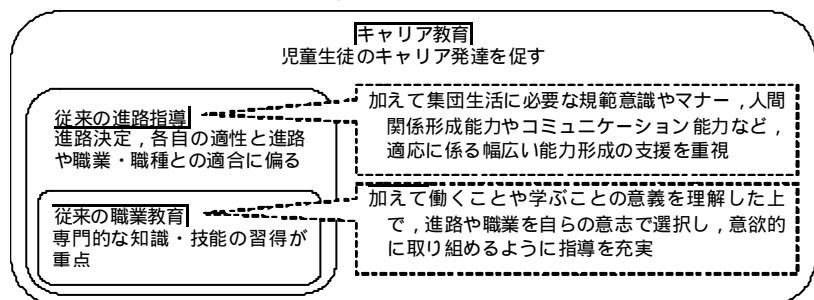


図 11 進路指導、職業教育とキャリア教育

() 自分の立場や役割をよりよく果たすために必要な力を、児童生徒がその発達段階に応じて身に付けていくこと。

を理解させる教育活動が一体のものとならなければならない。しかし、従来の職業教育では、専門的な知識・技能を習得させることに重点が置かれ、生徒のキャリア発達をいかに支援するかという視点からの指導が十分であったとは言い難い。今後は、児童生徒が働くことの意義や専門的な知識・技能を習得することの意義を理解した上で、科目やコース、将来の職業を自らの意志と責任で選択し、専門的な知識・技能の習得に意欲的に取り組めるようにする指導を充実することが求められる。このような意味から、職業教育は、進学を目指す生徒にとっても重要である。進路指導、職業教育とキャリア教育の関係を整理すると図 11 のようになる。

2 これまでの教育活動をどのように変えればよいのか

児童生徒がなりたい自分に出会い なりたい自分の実現に向けて努力していけるようにするため、次の 2 点から現在の教育活動を見直していく。

- ・ 児童生徒が、自分の生き方をできるだけ多くの大人と話題にするきっかけをつくる。
- ・ 児童生徒の変容を見届けるとともに、その成長を促す場면을意図的、計画的に設定する。

キャリア教育の視点に立つということは、新たなことを始めるということではない。教育活動の一層の充実を図るため、次の流れで教育課程を見直すことが大切である。

(1) キャリア教育全体計画を作成する

児童生徒が、自分の立場や役割をよりよく果たすために必要な力を発達段階に応じて身に付けていけるよう、学校教育目標で目指す児童生徒の姿と結び付けながら、次の 2 点から教育課程全体を見直す必要がある。

児童生徒がなりたい自分を見付ける場面をどこに設定するかを検討する。

なりたい自分を実現するために児童生徒が努力する（教職員が児童生徒を支援する）過程を設定する。

そのためには、まず全体計画を作成する必要がある。作成に当たっては、児童生徒の実態、保護者や地域社会の願いを十分に踏まえるとともに、学校教育目標の下、各学年の目標、各教科、領域の目標や内容などを関連付けて、どのようにキャリア教育の目標に迫っていくかが分かるように構造化する。

(2) 核になる教育活動の位置付けを工夫する

核になる教育活動とは、児童生徒がなりたい自分を見付ける場面や、なりたい自分を実現するために努力する過程として位置付けられる。

児童生徒がなりたい自分を見付けられるようにするには、自分の生き方、働き方について考える機会として、できるだけ多くの大人の生き方や働き方に直接に触れること、生きることや働くことの意味を率直に語り合うことなどが必要である。職場体験学習やインターンシップ（就業体験）などの社会体験活動は大変有効な機会であり、事前・事後の指導と併せて、その充実を図りたい。商工会や厚生労働省、経済産業省の関係機関などと十分に連携をすることも大切になる。

なお、児童生徒の興味・関心や適性によっては、社会体験以外の体験活動や道徳、特別活動、各教科の授業で、なりたい自分を見付ける場合があることも忘れてはならない。

児童生徒がなりたい自分を見付けたら、次はその実現に向けて努力する過程が必要になる。

なりたい自分を実現するためには、適切に自己表現をしながら人間関係をつくっていく、未知の内容について学習する中で問題解決力を身に付けていく、努力を継続する過程で気力・体力、粘り

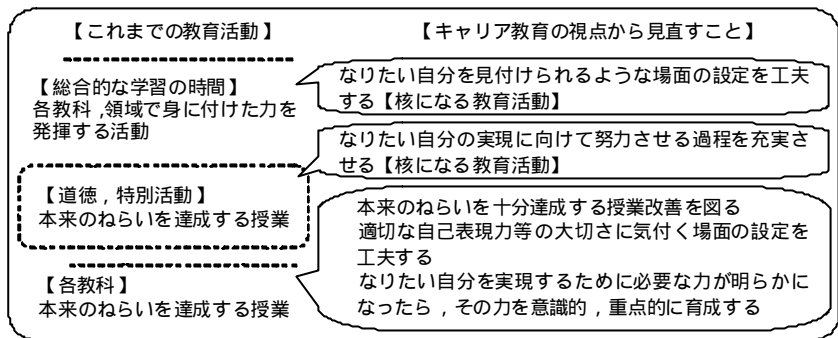


図12 キャリア教育の視点から見直すこと

強さなどの強い意志をもつなどが必要になる。そこで、各教科、道徳、特別活動の授業などにおいては、本来ねらいとしている力を確実に身に付けさせることが求められる。また、なりたい自分を実現するために特に必要な力が明らかになった場合は、各教科、道徳、特別活動の授業において、その力を意識的に、重点的に育成することも大切である。

なりたい自分の実現に向けて努力する過程においては、児童生徒がくじけそうになったりあきらめそうになったりすることも考えられる。そのような内面的な弱さを児童生徒が自ら克服していけるようにするためには、学級活動において目標を設定して集団生活の向上を図る場面や、道徳の時間において不撓不屈などの道徳的価値を追求する場面などが必要になってくる。

このような教育活動を、児童生徒の実態や体験活動の具体的な内容などを十分に踏まえながら、教育課程に位置付けることが求められる。

3 教職員はどのように変わればよいのか

- キャリア教育の視点に立った教育活動を効果的に展開するために、次の3点から資質向上を図る。
- ・ 各教科、領域等で本来のねらいを達成できているかを再度見直す。
 - ・ 児童生徒の個別の状況を踏まえた指導ができているかを見直す。
 - ・ 生き方を軸に児童生徒、保護者、地域社会、他校種と積極的にコミュニケーションを展開する。

(1) 各教科、領域等で本来のねらいを達成できているかを再度見直す

各教科、領域等の学習内容は、本来的に、望ましい社会生活を営めるようにすることをねらいとして構成されたものである。その意味からは、各教科、領域等の授業の在り方を大きく転換する必要はない。

ただ、各教科、領域等のねらいが十分達成できているかを個別に見ていくと、十分とは言えない状況があることも否定できない。そこで、ねらいの達成状況を今一度見直し、次の3点から指導方法の改善、充実を図ることが大切である。

各教科、領域等の目標を達成した児童生徒の姿を具体的に想定する。

児童生徒の現状を的確に把握することで、各教科、領域等のねらいがどの程度まで達成できているかを見届ける。

不十分な点について具体的改善策を検討し、その後の指導計画や指導方法を改善する。

(2) 児童生徒の個別の状況を踏まえた指導ができているかを見直す

児童生徒がなりたい自分を見付ける場面や、なりたい自分に向けて努力する過程は、本来個別の物的なものである。同じ体験をしても、同じ話を聞いても、何に心を動かされるか、自分の将来にどのようなイメージを描くのかは、一人一人で異なってくる。また、体験活動を通してなりたい自分を見付けたり、そのための努力を継続したりするためには、事前指導や事後指導、体験中の声掛けなどを、個に応じたきめ細かなものにしていく必要がある。そこで、カウンセリングの考え方や技法が重要になってくる。

具体的には、校内研修の中にキャリア・カウンセリングを取り入れたり、校外で行われるカウンセリングの研修を積極的に活用したりするなどの工夫が必要になる。

(3) 生き方を軸に児童生徒，保護者，地域社会，他校種と積極的にコミュニケーションを展開する

児童生徒が自分の生き方，働き方に確かな見通しを立てるためには，明るく，たくましく生きている大人の生き方，働き方やその思いに直接触れる機会がきわめて重要である。しかし，そのような機会が少なくなっていることも事実である。

大人たちが，生きること，働くことに対する自分の思いを児童生徒に直接伝える必要性を改めて自覚し，意図的にそのような機会を設けていくようにしていくためには，児童生徒の現状を適切に伝えるときも，機会をつくることの大切さなどについて啓発を進めていく必要がある。

教職員は，様々な社会人の生き方を各教科等の授業の中で話題にする，目標とする生き方に近付こうと努力している児童生徒の姿を家庭や地域社会，他校種へ発信するなどして，生き方を軸にした多様なコミュニケーションを多方面で活性化させるきっかけづくりを積極的に行いたい。

4 キャリア・カウンセリングの充実

学校におけるキャリア・カウンセリングは，児童生徒一人一人の生き方や進路，教科・科目などの選択に関する悩みや迷いなどを受け止め，自己の可能性や適性についての自覚を深めさせたり，適切な情報を提供したりしながら，児童生徒が自らの意志と責任で進路を選択することができるようにするための，個別またはグループ別に行う指導，援助である。

キャリア発達を支援するためには，個別の指導，援助を適切に行うことが大切で，特に，児童生徒一人一人にきめ細かな指導，援助を行うキャリア・カウンセリングの充実が極めて重要である。以上のことから，すべての教職員が基本的なキャリア・カウンセリングを行えるようになることが求められる。

(1) キャリア・カウンセリングの役割

従来の進路指導における相談活動には，選択決定が近づいた時期において，生徒の卒業後の進路を指導するというイメージが強い。キャリア・カウンセリングという用語は，このような指示型の進路相談のイメージから脱却し，カウンセリングに本来含まれている開発的な要素を強調するために用いられる。

キャリア・カウンセリングは，これまでのカウンセリングが主として治療を目的とする傾向があったのに対して，職業生活における自己実現のための開発的な要素が強く，受容と指示，双方の性格を兼ね備えたアプローチがなされ，それらが循環的に継続されることに特徴がある。